

東京 2020 オリンピック・パラリンピックが新型コロナウイルスの世界的な感染拡大の影響を受けて1年延期となった。天理参考館では天理図書館と共に創立90周年を迎える本年、併せて日本でのオリンピック開催を記念し、スポーツの歴史と文化を繙く特別展の開催を企画した。残念ながらオリンピック・パラリンピックは2021年夏に開催延期となったが、世界各地の生活文化資料と考古美術資料を収蔵する当館ならではの視点で、「スポーツ」とは何か、人々を熱狂させ、心をとらえて離さないその魅力について特別展で迫りたい。

現代の私たちが「常識」と思っている事柄が、ほんの100年前までは途方もない「非常識」であった場合も少なくない。スポーツについても例外ではないだろう。グローバル化した「近代スポーツ」と対極を成す、特定の民族や地域に固有の伝統的な「民族スポーツ」について、その歴史も含め、関連する資料を今号から連続して紹介していく。

オリンピックは元々、古代ギリシアでゼウス神を喜ばせるために始まった競技大会だと言われている。男子だけが参加を許され、選手も審判も観客もすべて男性。しかも選手は一糸まとわぬ全裸で走ったり跳んだり投げたりしたと伝わっている。現代では異様に思えるが、みんな大真面目で、このような全裸の競技大会が千年もの長きにわたって開催されたのである。神に愛される美しい肉体を見せるのがギリシア人の誇りであり、恥ずかしがるのはバルバロイ（異民族）だと軽蔑した。この伝統ある競技大会を破壊したのがキリスト教である。ローマ国教となったキリスト教は異教信仰に基づく祭祀であるとして古代オリンピックを禁止し、神殿も破却した。その後、キリスト教はヨーロッパ全域のみならず世界中をキリスト教化すべく全精力を注ぎこむ。その武力を担ったのが騎士たちであり、その騎士の子孫が貴族である。

古代オリンピックが消滅しておよそ1500年の後、「オリンピック」として復活させたのがフランスの貴族、ピエール・ド・クーベルタン男爵だったというのもある意味皮肉なことと言える。彼が提唱した近代オリンピックの第1回大会が開催されたのは第一次世界大戦前の1896年であり、クーベルタンはじめヨーロッパ貴族たちが準備を進めたオリンピックに選定した競技種目は、当然ながらヨーロッパを中心とするスポーツ文化を反映したものであった。近代オリンピック第1回アテネ大会で実施された競技は、陸上、水泳、体操、自転車、フェンシング、レスリング、テニスの7種目で、古代オリンピックに倣うというよりは、当時ヨーロッパで盛んだった種目、クーベルタンたちが親しんでいたスポーツを選択している。クーベルタンたちは特権階級であり、彼らが親しんでいたスポーツとはお金がかかるものであり、特権階級に有利なスポーツが採用されたと言える。第2回のパリ大会（フランス1900）、第3回のセントルイス大会（アメリカ1904）はともに万国博覧会の添え物として開催された。パリ大会では万博会場へ人の流れを誘導するために隣のブローニュの森で陸上競技が行われており、当時はまだスポーツやオリンピックに対する一般の人々の関心が薄かったことがわかる。

さて第1回大会は「古代オリンピックを復活させて近代オリンピックを開催する」と主張する以上、アテネで開催しなければ格好がつかない。そこで古代ギリシアのマラトン（アッティカ半島東部の地名）の故事を聞いたクーベルタンが陸上競技にマラソンを採用することを提案した。その故事とは、紀元前490年アテネがアケメネス朝ペルシアを迎え撃ち、絶命絶命のマラトンの戦いでペルシア軍を撃退して勝利した際に、健脚の兵士がアテネまで駆けて「我らは勝利せり」とエヴァンゲリオン（吉報）を告げて絶命したというものである。近代オリンピック競技種目に古代オリンピックに由来するものはほとんどなく、それまで冷ややかだったギリシアの態度はマラソン採用で一変した。第1回アテネ大会ではマラソン出場者の大半をギリシアが占め、沿道の声援は熱く、ギリシアのスピリドン・ルイス選手が優勝した瞬間は2400年前もこうであったかと思わせる大歓声のアテネに響きわたった。当時の兵士がどこからどこまで走ったのかは正確にはわからないが、マラトンからアテネまでの距離を測ったらおよそ40kmだったので、その距離で競争を復活させようということに落ち着いた。現在の42.195kmに統一されたのは第8回パリ大会以降のことである。42.195km走るには体が軽く、かつ筋力がしっかりしているのがベストな状態とされるため、マラソン選手はレースに向けて体重を極限まで絞込んでいく。極限状態にあるため、レース途中で水分を補給しなければ脱水状態に陥ってゴールにたどり着けない過酷な競技である。

「走る」にまつわる資料として挙げるのは、ギリシア陶器の一種で、混酒器の赤絵式渦形クラテル（図）。紀元前4世紀頃のもので伝わるのでマラトンの戦い以降の作である。「ギリシア陶器のほとんどは副葬品として墓地から、あるいは奉納品として聖域から出土したもので、住居跡から出土する日用品とは異なり、精巧に形づくられ、見事な文様や絵画で飾られている。そこに描写された内容は各時代背景や人々の思想が密接に関係し、技術の進歩にもなって表現方法が発達していく中で、ギリシア陶器の歴史は展開していくのである」（天理ギャラリー第138回展図録『ギリシアの古代美術』2009: p.6）。ここには右手にキスタと呼ばれる容器、左手に鏡を持って走る女性が描かれている。このフォームは、現在のように右手と左足、左手と右足を出す「逆ひねり」を利用した走り方ではなく、右手右足と左手左足を同時に前へ送り出すいわゆる「なんぼ走り」である。日本古来の走法が実は古代ギリシアでも存在したとは！おそらく手足の左右を変えて走ろうとすれば長いスカートが足に巻き付いてしまったのではないだろうか。「時代背景や人々の思想が密接に関係した表現として大変興味深い。」



図 高さ 48.0cm  
紀元前 4 世紀頃

〈図は天理参考館蔵品〉